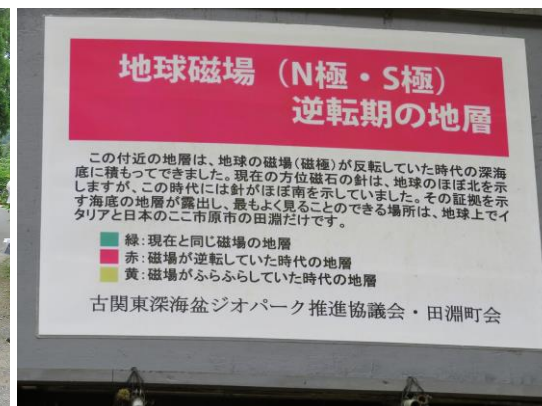


自然観察ちば 研修会「今 話題のチバニアン」2018年5月30日(水)  
参加者:26名、講師:県中央博物館 高橋直樹氏、場所:市原市 田淵会館

講義:房総半島の大地の成立と「チバニアン」  
地磁気の逆転地層(赤色)



月崎駅から2kmの田淵会館、会館の皆さんにお世話になりました。講師の難しい説明にも何とか理解？

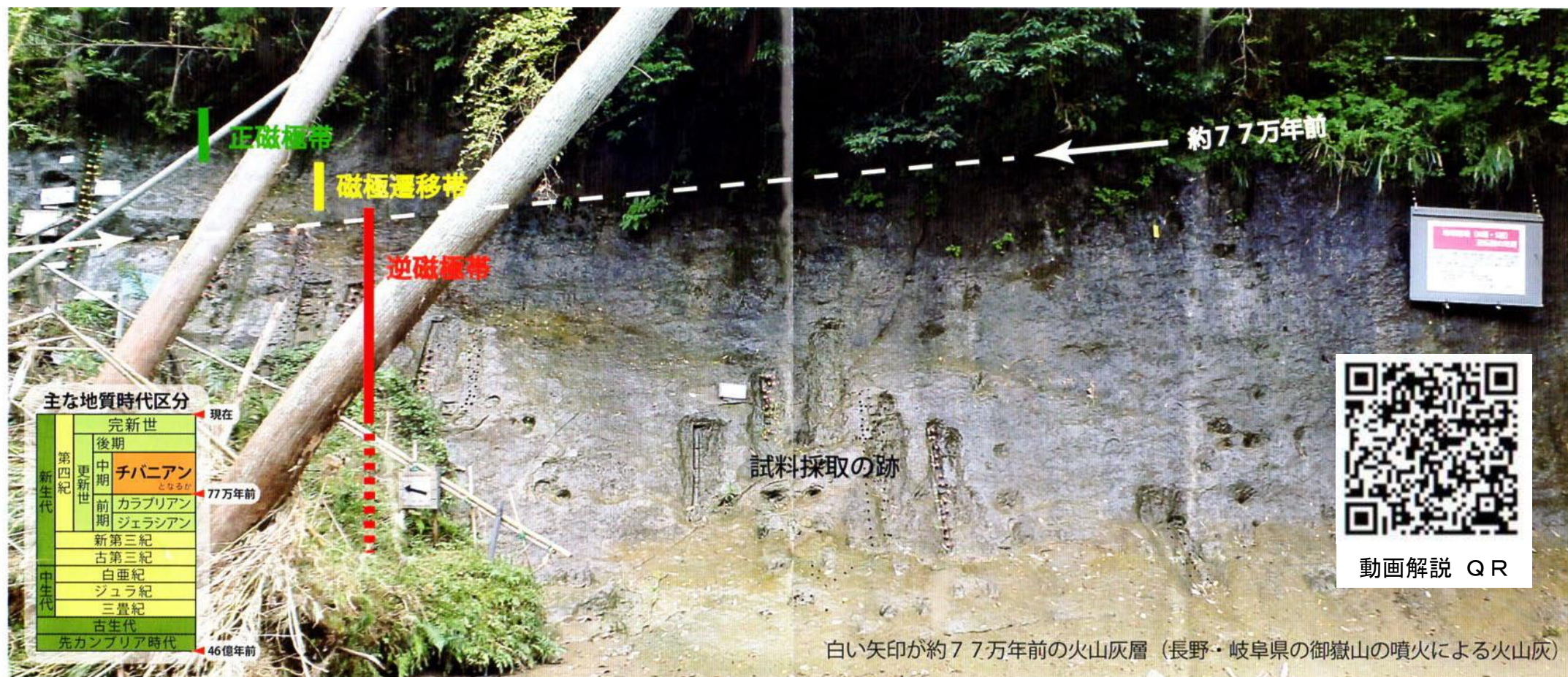


地質・地層条件に恵まれたこの地区の詳細説明をしていただきました



現地の養老川の様子を観察し、地質・地層・地磁気逆転の現状確認





**地上に現れた海底の地層** 養老川沿いの露頭「千葉セクション」の上の方に、一本の筋が見えます。これがおおよそ77万年前に御嶽山が噴火した時の火山灰の堆積層で、地磁気が逆転していた時代の目印になります。そこから下はもっと古い時代、上は新しい時代の堆積です。これらは海底で堆積した地層が、後に房総半島が隆起して、養老川の浸食作用によって崖になり、見えるようになったものです。

**地磁気逆転の証拠** 露頭の各所に試料採取の穴が開いていますが、地磁気の逆転を連続して分析した跡です。地磁気の逆転は、過去360万年間だけを見ても11回確認されています。その最後にあたる77万年前に起きた逆転について、逆磁極期（上写真赤色）から過渡期の磁極遷移帯（黄色）を経て、現在と同じ正磁極期（緑色）に戻る様子が連続して分析・観察できる海底堆積層は、世界でイタリアの南部と房総

半島の地層だけであり、なかでも田淵の地層は、観察に最適な条件を備えています。

**科学研究の宝庫** 田淵の周辺地層は堆積速度が極めて速く、平均で1000年間に2m以上の地層の堆積が観察できるため、細かい分析にも適しています。地磁気の逆転だけでなく、地層に含まれる微化石や花粉を分析することで、当時の海や陸地の環境などについても研究が進められています。

**成るか「チバニアン」** このようなことから、千葉セクションは地質時代境界のGSSP（Global boundary Stratotype Section and Point、国際標準模式層断面とポイント）の第一候補地に選ばれました。今後正式にGSSPに認定されると、この地層の含まれる時代（約12万6千年前～77万年前、更新世中期）を「チバニアン」（ラテン語で「千葉時代」）と呼称し、日本の地名が地質時代名称に初めてつけられる快挙となります。